○景観を探る 3.「ヘラシギが生活する湿地」

講師：柏木実　(NPO 法人 ラムサール・ネットワーク日本 共同代表／（財）日本野鳥の会 嘱託専門員)

2011 年 3 月 26 日（土）於：千葉県立中央博物館　講堂　時間：13:00～14:00

ヘラシギはシギ・チドリ類の中では唯一ヘラのようなくちばしを持ち、スズメくらいの大きさでアジア大陸の東端のみを生息地としています。ヘラシギの現れる最初の文献は、19 世紀末のフィンランドの冒険家の紀行文に、「チュコト地方の王にくちばしのヘラになった鳥をごちそうになった」との報告があり、種としては古くから知られていますが、減少し続け、現在 200 番（つがい）未満と推定され、2008 年には、IUCN のレッドリストが CR（絶滅危惧Ⅰ類）に指定し、ボン条約は 2008 年 12 月にこの種に関する保全行動計画案を承認しました。その小さな体で、北極圏と亜熱帯の東南アジアとの間の渡りをする、神秘的な、愛らしい鳥です。

生息地はシベリア極東部のチュコト自治区とカムチャツカ半島東北部コリャーク自治区にかけた沿岸部で繁殖し、カムチャツカ、サハリン、沿海州、日本、韓国、台湾、中国などユーラシア大陸東海岸を経由して渡り、ベトナム、マレーシア、タイ、ミャンマーなど東南アジアからバングラデシュ、インド東部に至る海岸で越冬し、香港のマイポ湿地、ハンチョウ（杭州）、シンガポール、セイロンなどでも越冬の記録があります。繁殖期には、北極圏ツンドラ地帯の海岸から数キロの地域で、雪解け水の湖近くを利用して営巣します。非繁殖期はどちらかというと砂地の多い、河口、干潟を生息地とします。近年日本では埋め立て地の砂泥部で採餌することも多く見られます。

主な脅威は繁殖地における天敵、開発、狩猟の問題。中継地における開発による生息地喪失の問題、越冬地における狩猟圧と今後起こるであろう開発の問題が指摘されている。この中で、特にミャンマー・バングラデシュという主要越冬地における住民の生活の質の向上と結びついた保全策と、各地の開発の圧力を食い止めることは喫緊の課題です。

つい最近、オオソリハシシギというシギの仲間が、ニュージーランド/オーストラリアから黄海までノンストップで飛び、今度はアラスカに飛んで繁殖期を過ごし、再びニュージーランドまでノンストップ、というとてつもない長旅を毎年行っていることが衛星追跡で確認されました。シギ・チドリ類の中にはこのオオソリハシシギ同様北極圏で繁殖し、南半球で非繁殖期を過ごす種が多くいます。しかし、くちばしをはじめ、その姿の違いは様々で、生活の仕方も様々です。ヘラのようなくちばしをしていて姿は知られていますが、生態などはあまり知られていないヘラシギの 2000 年以降の繁殖地・中継地・越冬地における調査の情報も交えてお話しします。